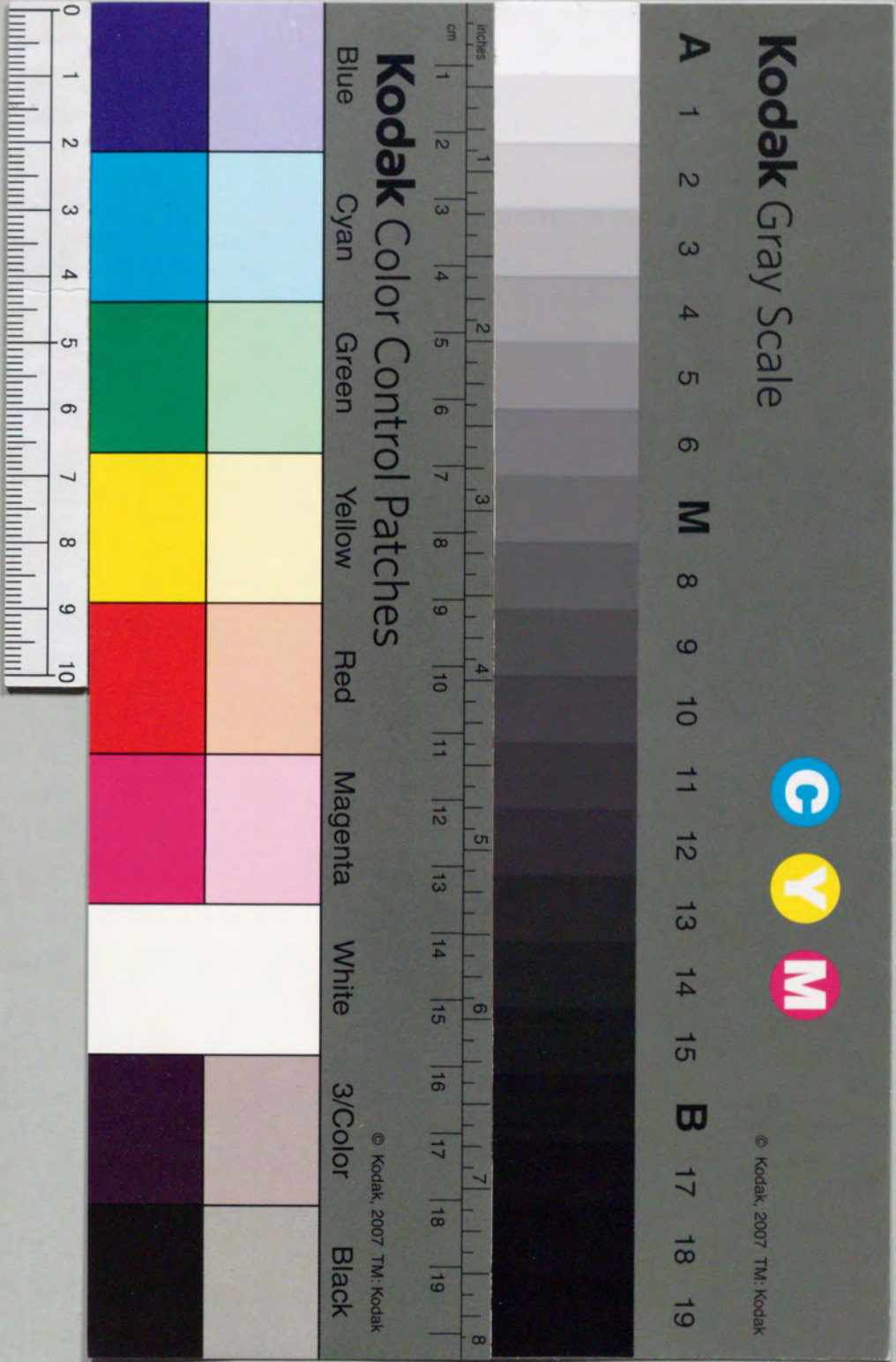


三家抄句解  
字彙  
中



Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak

培堂

吾菜園はあきふる子さ句よ

佳屈つ小蟻とをら花さる

あしよるをくかひはあはる巻

とめ 秘置ふと花打あはる

あの大は貝ひらく字一勝り



7770

し

月より繰返す我の友人の  
もろくもなほ人よりのや  
るし世に様あるを人の心  
道ありし世に乃ちありてあり

のよきなり黄蝶菜英述



### 晋斎句解叙

晋子の句は奇なり活潑潑地  
その興象あはれ花の一時のあり  
又鉄子にもむ者といふも彼後の  
題の拘り意匠経管ははるばる  
有録の華堂ありて新しき世あり

何れも解也と云ふ事も解と云ふ  
水に氷を抛る真華の頗没交  
渉人といふ事も此蛇足を流  
望の境地を了る如好子中む  
事を得ざる如為の事といふ

寛政丙辰自筆

莊郎題



晋子發句撮解

共陸拾伍吟

菜穂叟莊丹述

門人 黄蝶堂米英校

○蓬萊米如讚

島と云ふ語之の書院の如くも

島より云ふ雨氣の如くも海を如  
くも身由る如くも此の書院の蓬

萊方丈高麗洲のころを形容する也

○加州小松歡音寺奉納

梅窓且那を待とく庭子あり

田村の謡曲ウタヒ一人のらうあう方かのお

きふかつゝめいそく我れお毒うはこ

トとさうふんぢ一人のた人をよめ

火か人をまへうす魚しをこ

いさしういさかたつめわいんきやうらこ

いさしういさかたつめわいんきやうらこ

た人又た人かよすくと者一は是坂のま  
たむし丸梅の姿を髪よめつらり

破魔子や山打紅裏四天王

祝イハヒ高山とりの其以紅裏 御免の方

く四人ともとや素平の四天王おえん

彼一往昔は四天王は甲曹と着す

當時の詞力なり破魔子も治世の意

○掌府参り詣り舟中

菜のどほ小坊主了角かうりる

按ふに鬼戸ありし潭北。集よ音  
子ららるる葉の麻葉のむら  
まの葉は終る閑るを

○護國寺のりふ時馬さるる

志の雲やむらむら顔の泣く

表中郎送李湘洲使浙 咫尺

山東道千艘與萬艦郵棲常下

鶴驛飯一炊菰閉口聽朝事降

心祖佛徒不言知向越面上有

西湖 音子自注袁中郎面之西湖

湖とあり中郎の明朝の文く袁中

郎全集二十卷あり千載集より

さくはる山風わかにむら

り志かの波 左中將良經顔とある

精舎にむらむら面之海にさるる

り思へし又禪止少衛仲國のあり

よのつらあらし

○悼後の立志 初音の女ありし自注あり

昔の初音三井寺後如春

立志の二代はくともる立志のほ  
ゆの遊女ありと又三井寺の風を好  
事申ありたり

○六段の意四句 凡六句あり

疑点 どの愛胡蝶と如くし辰く物

牡丹と下は睡猫又胡蝶の愛は莊子  
逍遙遊篇の化水木辰之物は三井寺  
奴後者少く身はかりき藤のいとく

蝶のかりきなり

寄竹成埋らぬもの涙や三井

嫡皇女英舜崩し玉ひくかき  
涙と弁とほふらぬ紫弁ありとま  
己う毛色の斑ありし紫弁 曰斑弁  
涙弁

幼意とくまら百目をあかきか

猫兒百目ありまの乳はとま 他は  
新古今戀一とりのま好まふあり

とらきつれりいふことあるあつた  
是則百目りるやあきとていふもあつた

寄寺恋 柏木の柳もどねあつた猫

源氏常木よりのまはあきあつた玉  
いぬくさなほらふもあつたあつた  
御息所 愛猫の寺あつた物の数とあつた

たつた

藤沼や塩沼よするあつたあつた

塩沼の鰻取の家又茶の湯あつたあつた

名物あつたあつたあつたあつたあつた

花後よ極や歌舞あつたあつた

あつたあつたあつたあつたあつた

○市川女牛追善

一子九藏あつたあつたあつた

塩沼の父あつたあつたあつた

九藏の故海あつたあつたあつたあつた

故園千郎あつたあつたあつたあつた

七とつたあつたあつたあつたあつた

日記

五

日記

四



相きにも留すらたぬまゝりの意  
けいひかけぬふ顔の雄子の顔は赤  
きは形容しつゝ何事仕の赤くぬり  
たふお言作あつて

明星也横はつり也山うら

る子句又才よ云ぬ星や横定の也  
山あつと云し句出なれどその  
無感せまうりしは芭蕉翁吉野山  
権るゝ山中の美景に事なれり

記奇らゝの信と感せし序の星  
山あつと云ぬ残るけし句は  
中りくえふるも一通り  
中りくえふるも一通り  
隔らぬもけ句は感して角流る  
醒る期あふ此句の白の美世消す  
〜はとそ勘氣は聴うととや

○因女の家

かつきの神いつまよとあゝの雛

吾子短冊之事者園如の山くくと  
り古事記曰雄略天皇登幸  
葛城山之時百官人等悉紹着  
紅紐之青摺衣服彼時有其自  
所向之山尾登山上人既等天  
皇之鹵薄亦其裝束之狀及人  
衆相似不傾余天皇望令問曰  
於茲倭國除吾亦無王今誰人  
云故吾為名告吾者雖惡事而

一言雖善事而一言言離之神  
葛城之一言主之大神者也云  
神社啓蒙曰諺曰昔倭小角集  
衆神於葛城金峯間架石橋其  
以不早成而小角怒呪一言主縛  
繫之深谷云蓋小角葛城里民  
而一言主者天神裔胤也何為其  
然乎いむをいむおのまきくをた  
ゆるをいむをいむあひまきかつあひ

神按するふむえと云ふ事なるは

雛のまの宮殿のまははるる

香子文通は中よ是は大きき雛か

辰くちいさく立ちあふ中りたゆく

のらららとあり

山様を放して梢の事

同し書の中よ書き梅と称す

かなあしといとあり

雀子やあふり雉子の世う新

自注よとひつりい〜や〜と〜と  
あり井蛙抄よ為氏は〜のたか  
〜と〜と〜と源氏よ紫よす  
〜の子はいぬと〜は〜と  
と〜と〜と〜と〜と  
け源氏物語のよようぬり雉  
子はよみ入〜あり孟よたか東  
門院のよと童よ此名ありとい

〇 野水

ちくちく川 春のや 較の髓

筑摩川 信濃 風雅集 よちくち川

春の氷 すきふりき てるてる

〇 のよ 宮 順徳院 雪のふり

較の骨 おぼろ

〇 長嘯の記 浅州 観音と 国女

すて あま 佛 あま 口 あま ぼる

せ あま ぼる あま ぼる あま ぼる

春のふく あま ぼる あま ぼる

其 あま ぼる あま ぼる

上手 あま ぼる あま ぼる

女子 あま ぼる あま ぼる

て あま ぼる あま ぼる

風 あま ぼる あま ぼる

延年 あま ぼる あま ぼる

と あま ぼる あま ぼる

句 あま ぼる あま ぼる

風と秋興あり

景清の雨帯身せぬく二廿部

らね何書りく大文司は娘より

又五條坂を通くを二女所帯との他

警子長刀かぶるけしり車

雪のほろろすほとをたを大長

刀ふらぬとかきやを

有明の面起きややうあは

長嘯奉白集逆衣の天和うと

好せたあ大臣くく月花を尚若  
こすき可らねてあり

夏人間う四月かきも郭公

白氏文集十六大林寺桃花

人間四月芳菲盡山寺桃花始

盛開長恨春歸無覓處不知轉

入此中来又法女枕を子よるの

四月をいとしくわつふとあり

阮咸の三味線志く〜 時鳥

〇

九

阮咸等の七賢は一人ひとりの弦を  
阮咸の月琴より出ると藤林伐山  
記す訓蒙圖彙は阮ハ阮咸あり月琴  
同ハ四絃十二柱或ハ五絃十三柱又  
有月琴圖ハ阮咸異あり本朝ハ  
寛文の江琉球より傳ふると

○曲終無人聲

嘆う反吐いどふもり 郭公

王元美史記叙湘靈鼓瑟於秋

江之上曲終而人不见うね抱娼  
家句狂言ハ八千八聲唱う血吐と  
う反吐志をのつて少許句詞あ  
れるうねくまねるも連歌もあ  
吐と詠すとま反吐りと希取物徳の詞也  
子規一二は橋のあゆま

一二は橋江戸本一ツ目二ツ目の橋  
一ハ一のみ二ハ二の橋とて此句其の  
うね景色ゆく短冊との詞

所持の家ありと

文七少少の庭うらうら

牛の子のうらうら庭のうらうら角

りのとて身をといたのす 慈鎮

文七え結の足りす

○丹羽丸京守のとり

ゆきしうりなる糸勅に

黒牡丹福るく福りもの大毛

かのよま萩かる男ふるまをま福る

福りものさげとありし福りとい

本は福ちり物をゆふあり福りも

りし鎗とありし福ちり牡丹の

こくありとあり黒牡丹の後の句了

解る通して見る

懺之長者うらま也黒牡丹

唐劉訓京師富人梁氏開國嘗

假貸以給軍京師春遊以牡丹

為勝賞訓邀客賞花乃繫水牛

○

○

數百前指曰此列氏黑牡丹也

とさういふ家になつる懶の教作

毛の毛繪は好むの牛とさういふ

如く長者の看とさすを藝花に

氣象下調香子三作あり按るに

支考十論為赤按十六如や新

肉の句二作此句三作の誤なり

○一晶の窓坊あり

日蓮よ木す清と蟬の鳴けり

日蓮法書の中身延山法抄は惜不

一葉の葉は結い下枝了鳴蟬は香

溢シガく故と淨瑠璃の文句あり惜

蟬の鳴けりとあり日蓮山入の辰あり

香子の此詞ありありあり

○望相劫

雲見州鎌倉君さうり日、照れ

鎌倉おふ深の町の唄とや坊さんよ

沙汰さんよ鎌倉五山とやうくす、死と



おの泊人せ藤倉中よ日く思ふ雲見  
叶ハ標りあり

○翁より好文よ都のまよふとく又さら  
風ありともすをせらるる関のまよ  
らめり

丈山の瀧〜地あとに涼〜る軍

石川嘉吉連 叡山の棟一乗も村に隠  
道〜とわ〜るふせと小川の清  
らも六老の浪より新と歌と詠〜

好〜い洛へ往〜るに意あり

○五月十日雷雨水代島の

茶店ふ中〜る〜

明るより神明暗く鄭の蓋

源氏の名の美よ〜る〜雨風の

つらのも〜る〜る〜る〜る〜る

博物志よ雷の鳴らる將領西征

字ねい腹の腹い〜ると〜る〜る蓋

と〜る〜る

若うとよ町京起く月の色

矢根おきの歌舞妓の浄瑠璃よ  
町京由らと見むつくと起ありとも  
活作あり

蕨もあすは鼓かつらうと

難波の謡曲よ波をさうの口さ  
さう先むさうの曲かつらうは入  
はひきさかすあつた大鼓  
波もあつらうとつらうと打

あつた町京起く舞ありおとあり  
活作あり

業研てふ新炊あらす頃の月

梅花心易よ文の面の時郎康節一  
子と権を権して坐るよ芥菜  
りおまのつとつと芥菜と芥菜の考文  
子の心易のつとつと業研をかりよ  
来あつたがつと用ありつと推せよ  
頃の月つと用ありつと或俳子の考

日記

十五

十四

理當然也

○宗因先月とてうら句強らうと

芋の 凡僧都の二百貫

はまの 中六十位も真乘院了  
盡親僧都とてやんよかき智者  
あまのういもあいらとてあまの  
このまてあまのういとて法親の  
なまのあまのういとて法親の  
くまのういとてあまのうい

あまのういとてあまのうい

あまのういとてあまのうい

あまのういとてあまのうい

あまのういとてあまのうい

あまのういとてあまのうい

あまのういとてあまのうい

あまのういとてあまのうい

あまのういとてあまのうい

あまのういとてあまのうい

者ありと人ナリ。 羊川  
先月以賣七雲山宗國

○寺

先月おごり僧の茶ふり人  
萬葉才之茶ふり人けふもふり人  
仲まろ旅やあけの推の茶ふり  
もろ

名月や井汲空ふもく雀

こもろ里をたぐりてぬれ句と一羽

句ありて音子り定不定の句と字  
江戸堀江町星那植古其家の  
家小二句のまの蹟ありて甘ん定音  
子り門人あり

○中の綿あり

幸清の雲は海あり昔松

幸清は清の音あり鼓の家ありまろ  
は離の鼓の音あり懐旧の句と句也

○七夕ありて一もろ

行水と数くくくも紙を小傘

子供の妻よ七夕の夜はくしの表  
紙の巻は傘をとくして舞ふ紙画  
伊勢物語よゆく水と数くくくも  
くくくおきいあひのぬ人をねあふく

秋のくれば祖父のあつらえそのまゝ

祖父のあつらえの蟬蛸のぼくす不則蟬蛸

みり 蟬蛸 イボジリ  
オ、チガフグリ

○本集は詞書畧之其中は村雨は心

私語の身はとくくく

白樂天長恨歌曰小絃

切切私語

○く名風情の人一藝のりやとて

十五の酒とのくくもあつら

白樂天琵琶行十三學得琵琶成

名屬教坊第一部又東方朔

十五學擊劍十六學詩書又南

史鮑照嘗賦擬古詩云十五諷

○兄

詩書<sup>ヲ</sup>々<sup>々</sup>篇翰<sup>ヲ</sup>麻<sup>ヲ</sup>迹<sup>ヲ</sup>不通<sup>ト</sup>

○吉野山あませししころりこよひらぬ  
く風とよまれし世并もに藤ふて

頼政の月見<sup>ニ</sup>あや九月<sup>ニ</sup>盡

新吉方<sup>ニ</sup>こよひたきすく風<sup>ニ</sup>身<sup>ニ</sup>  
しめしゆくめたけ小月<sup>ニ</sup>とえ

ふらん 頼政

ト石<sup>ニ</sup>あましに思<sup>ひ</sup>ぬくけ相撲

師院<sup>ニ</sup>あ撲<sup>取</sup>のま<sup>か</sup>しと<sup>ニ</sup>石<sup>ト</sup>

しとぬくとしと讀<sup>ん</sup>くと思<sup>は</sup>ぬと

しゆひのあとしとト<sup>ニ</sup>志<sup>め</sup>のやも

よむと又<sup>ニ</sup>しゆひと<sup>ニ</sup>むか

月<sup>ノ</sup>さとし詩<sup>ノ</sup>の舟<sup>ノ</sup>山<sup>ノ</sup>市<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>武<sup>ノ</sup>

山<sup>ノ</sup>市<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>武<sup>ノ</sup>屋<sup>ノ</sup>形<sup>ノ</sup>船<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>あり<sup>ノ</sup>著<sup>ノ</sup>聞<sup>ノ</sup>集

白<sup>ノ</sup>河<sup>ノ</sup>院<sup>ノ</sup>西<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>は<sup>ノ</sup>行<sup>ノ</sup>幸<sup>ノ</sup>此<sup>ノ</sup>町<sup>ノ</sup>詩<sup>ノ</sup>歌<sup>ノ</sup>管<sup>ノ</sup>弦

の<sup>ノ</sup>船<sup>ノ</sup>を<sup>ノ</sup>う<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>人<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>世<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>大<sup>ノ</sup>納<sup>ノ</sup>言<sup>ノ</sup>經

信<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>船<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>く<sup>ノ</sup>あ<sup>ノ</sup>ら<sup>ノ</sup>お<sup>ノ</sup>作<sup>ノ</sup>とい<sup>ノ</sup>れ

是<sup>ノ</sup>は<sup>ノ</sup>之<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>船<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>名<sup>ノ</sup>も<sup>ノ</sup>田<sup>ノ</sup>融<sup>ノ</sup>院<sup>ノ</sup>の<sup>ノ</sup>法

○兄

○兄

時大納言公任亦此の河へ其角  
田吉句合才十四左 お月のをよふ詩の  
あひら山あり川武 移りまは農ま右さ  
比ふ葉の戸泥坊よ よかにか  
月 かきの町へ 芭蕉判嵐雪序句合  
延宝の作あり

○格枝亭 柱うへ  
乾や兌坎震離ス艮坤巽  
冬や秋のゆり とるす 山あらし

はよみ ひ 下字自知 は へい の けい を  
海 と 糸 希 あ し 山 中 海 と 糸 希 其 聲  
人形をつら ま つ ま の 人 形 う え 証  
象 漫 備 ふ 飛 弾 の 椽 と 受 候 す  
か も な え 残 る 人 形 の や ま う う う  
ま う 如 く 又 ま う ま う ま う ま う ま う  
く と の ま う ま う ま う ま う ま う ま う  
合 其 盤 の て り 函 谷 の 海 と 糸 希  
と も あ り

〇見

年

〇見

年

山城のつた鑄の形や銚西氏

釜師の孫と今やあつた目玉篇柯

魯切銚銚金

よきよのや龍眼肉のわくわく

龍眼肉の殻をさくく一貫と一貫を

さく形の既望のそくわくわく

わくわくわく衣の殻をさくく比喩あり

よきよ二作

○波あそく

ちのあふ何とあつたう舟の中

鞆の狂言小舟の中六何とあつた

若狭のき森の揖まつたあつた見

らゆの舟のせむしよつたあつた

は本戸や銚銚のわくわく冬も舟

平家物語五月見は惣門のあつた

さむしと舟を東の山門より入せた

つと中々わくわくと又百葉道灌山あつた

は道や鑑のわくわくあつたあつた

〇記

三



子と擬し来ふ

伊勢方島と似せぬとす」と評也

伊勢方島之内の頃より手評也

の末流室也此作は文句詠唱

いせ傳風のるるを学ぬて殊緒

あぬよの作言五え集捨遺伊勢評也

着ぬる中こととの評也といふ

○尚流より室室什物きりく多し

中より小松との法然上人の也

松陰の硯の息と志らせりか  
とかりきり硯のうみの形空とす

松陰の硯の息と志らせりか

和漢三才圖會平相國清盛齋

黄金若干斤於趙宋天子所求

得者見盛衰記京百万遍什物

松陰硯紫硯石後重衝讓得之

乃最後遺之源空空又賜源智

以本平家親族也す

記

三

三

神の作あり

多隅 弱法師 我門ゆゑ解の礼

弱法師のまのまの心あり師走門の

小解と世々の礼をとりあり多隅の

隅當作寓字

昭 小解のやけふらへ 娘の君

娘の君、除夜小人家に柱の燈をゆ

きとよもすくくをく知つて去来

湖東回答に説き 按るおみえ集拾

遠来の此部より是の心すくくあり  
うはあ

句解兄卷 畢

晋子十及圖句解

菜肉叟莊丹謾書

以人 苗蝶堂菜英校

雜之部

画畧之

わらと圖りりひま  
畧之とちりり

往昔異邦の佛鑑禪師十牛と

圖して人間迷悟の間と志願と

水々其書狂言ふらら

〇第

七

〇第

七

牛の声音效有あり又及とも毛を  
あつり六桃あねをあり爰ふ十  
及の圖と画讀しして笑びる世  
つゝあもものあり 晉其角

○尋牛

やまのあひりしつと月あは

吾子の狂作ふ花街の事ありと  
つゝもあつたまます 尋牛とて  
周のあひねふ斗り月夜部の句ふり

悟道明周のころとて詠句のね  
系の本落しつたてとて其外は眼を  
ねありは句ハ吉系ハ燈の多くぬる  
外はつとつととやととと

○呼牛

よふこもあつたてとてあつた  
客の呼よあつたてとてあつた

○隠牛

夏の夜の福ぬふ疝氣の起る

○兼  
隱々隠居おろろり言光の多病は  
うぬの癖うぬぬさ戸

○貧牛

仁朱判やうぬうぬ少年男

其世のさまらふうぬうぬ取  
家語貧ふま

○廻牛

小便も算あつちあつち月々那  
娼家の二階の小水に軒ふとささ

○さつととと

○番牛

はとまの晴傘とわいせつを

曉傘の香子数柑子文集の文  
あつち雨のあつち客出便り

○無牛

きりくす枕も床も枕履也

うぬ履等如振替たふさうぬ  
紅圍の形容りる人詩七月篇十

○ 象

月蟋蟀入我牀下

○ 半牛

何となく冬夜うろたへしを聞けり

○ 門とたぐいの声やまひと一き也

○ 送牛

さあよりの千手陀羅尼や雲の声

○ 淡州寺の晨鐘客夢は寔

○ 敬るうけ

○ 老牛

くももまごころ人のこゝろ時雨

表老冬日の中いひ熱食を

りん

十及圖句解弟卷 畢

共

附録

莊郎評語晋齋十二句

○曲終無人聲

曉乃反吐ハ隣々不々々々

語逸意凄

よのよの了り金らきさるは毛杜き

能奇能麗

○ゆーん山よーん

明星やゆーんさーんあーん

蕉翁嘗遊于芳野山時曉天  
偶望雲間櫻花焉忽髮髻  
於此章之景情也於是字慨  
然歎角之才秀也既而其言  
曰角也性溺于酒雖然如其  
醒應有解之日如此章芳芳  
延及于萬世遂不可有消之  
期者也云是其蕉翁下所以爲  
最第一之者之者也

東町以猫かよひりて揚屋丁

猫戀之句此後寒々寒々  
無此妙矣

數入やむとりのあつとるや筭

伶俐之句

海棠のほのけや朧月

斜抱雲和深見月

朧朧對色隱照易

是即評



夕立也樂をとりて鬼俣師

俳力拔山

妹のまは嵐の行くく小あちり

自寫閨情来誰復擬

名月やあるの上よねの影

大匠之手

文月や陰返感ふ慟の内

情能心盡于此矣

むろ衛りのある寒くく虎許

美而艶たり

ふくくく蟬も雀も濡るは

吟哦生清風

共十二章

評語畢

待遊年

四

五

兼光く云之兼の者子

揚と探とも有らひく

一句くも解知あすとは

は遊の枝初人きまう

んとあり予是は閑くまの

後

三上

深之如切之也 五言了

通之青種之也

千叮字心以、百辰水每月也

与野之英人合也、此句陳量也

子中之後書也、此句也

# 句解跋

晉齊刷之以不用三息為句

也恰出<sup>如</sup>門望芙蓉蓉于碌

輩安企及焉業老之優游

乎其園國而為之解頤有

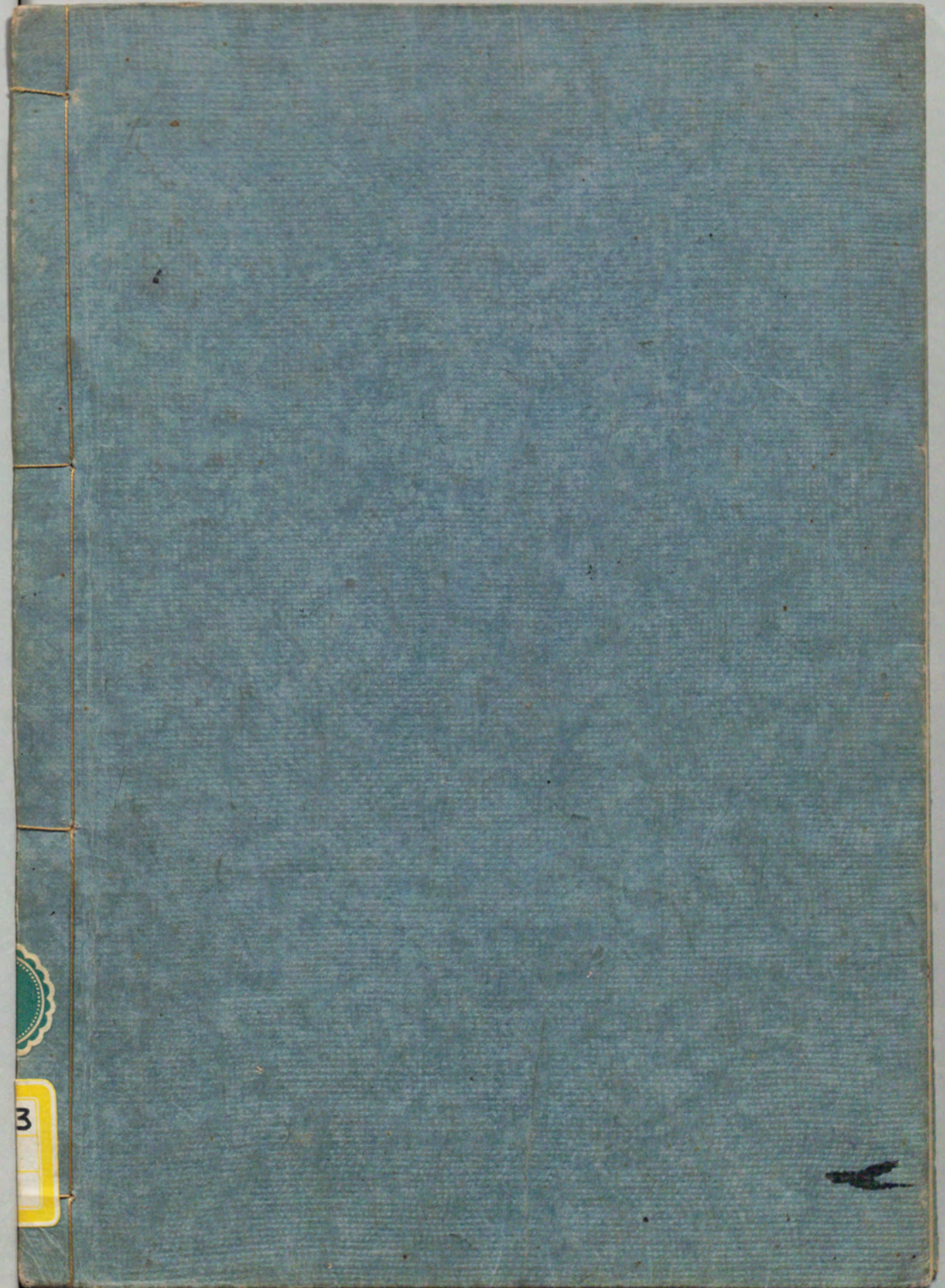
益于滑稽名流門人英生

跋

三

懷之來而謂曰欲謀之上  
才以同好醒模去志之醉也  
吾子夫筆焉予善其舉  
遂從時云爾

川村德撰



3